

発刊にあたって



学校長 山神 真一

菜の花に春の訪れを感じる頃となりました。皆様にはご清栄のこととお慶び申し上げます。

さて、近年の社会の急激な変動は、社会システムのみでなく、子どもたちにも様々な変化をもたらしました。全国学力・学習状況調査や全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果にみる子どもの学力の変容や運動・生活習慣の変貌など子どもを取り巻く教育的課題は、益々深刻化するとともに高い関心事となっています。

このような現状の中、本校では、平成20年度の『「生きること」と「学ぶこと」の統合をめざして一学びの拡充を促すシャトル学習の開発ー』の成果として、学びの意味化や価値に気付くことによる意欲化が、よりよく「生きること」につながることや、異学年合同の「シャトル学習」の開発による個に応じた学びのシステムの構築を提案することができました。

本校のこれからの研究は、これまでの研究開発で積み重ねてきた研究内容をさらに発展させ、『主体的に学び続ける集団の育成』を研究の新しい柱とし、交流活動を核とした研究課題に取り組んでまいります。また、本研究は、改正された学校教育法で示された学校教育の目標としての「主体的に学習に取り組む態度」を他者との交流を通して相互に学び合う集団の育成に視座を置いたものであります。

本号では、これまでの成果をもとに、新たに取り組む『主体的に学び続ける集団の育成ー「つなげる」「広げる」「深める」交流活動を核としてー』の研究テーマの概要を掲載致しました。ご一読の上、ご意見やご示唆を頂戴できれば幸いに存じます。皆様にはどうか今後とも変わらぬご指導とご鞭撻を心よりお願い申し上げます、発刊のご挨拶とさせていただきます。

〔研究主題〕

主体的に学び続ける集団の育成

ー「つなげる」「広げる」「深める」交流活動を核としてー

1 研究主題について

近年、将来に対する不安を抱えた子どもたちの姿や子どもたちの学力低下が叫ばれている PISA 調査や全国学力・学習状況調査には、わが国の子どもの学力の変容、長所や短所が表れている。このような現状の中、昨年3月、文部科学省より新学習指導要領が出された。ここでは以下の3点を基本的な考え方として挙げている。

- ・ 教育基本法改正等で明確になった教育の理念を踏まえ「生きる力」を育成
- ・ 知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視
- ・ 道徳教育や体育などの充実により、豊かな心や健やかな体を育成

基本的に前学習指導要領の理念であった「生きる力」の育成を継続することと同時に、知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力の育成を重点に挙げ、知識基盤社会における確かな学力の育成を重要視することを示す。さらに内容については、家庭や地域の教育力の低下に対応しようとすることを示している。いずれも、近年の社会と子どもの変化、現在の実態からその課題を明確にし、解決を図ろうとしたものである。これらは平成19年6月に改正された学校教育法第30条の内容を具体化しようとするものである。

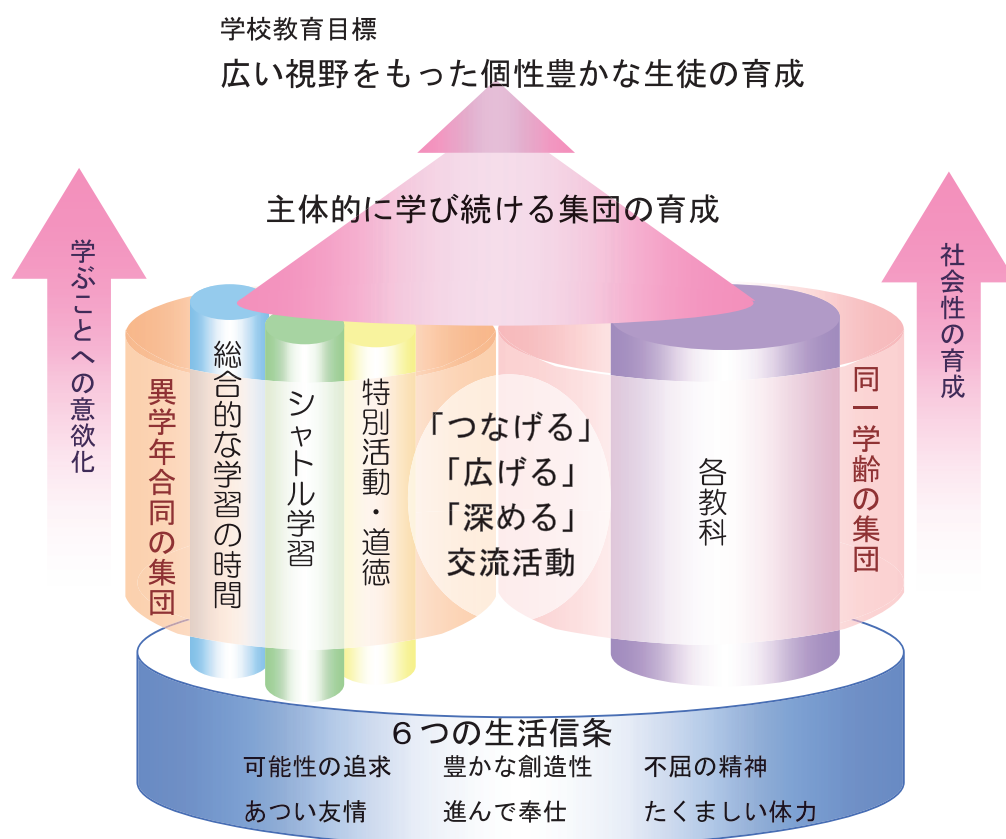
— 学校教育法第30条第2項 —

生涯における学習の基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うこと。

改正学校教育法や新学習指導要領の改正の要点を見ると、主体的に学習に取り組む態度、すなわち学ぶことに対する意欲を喚起することは、その中心となる内容としてとらえられていることがわかる。これは、本校が「生きること」と「学ぶこと」の統合を目指し、「学びの意味」を実感させることによって、学習意欲の向上を図ろうとしてきたことと軌を一にするものであると言える。

そこで今回の研究では、生徒の学ぶ意欲をさらに高め、確かな知識・技能の習得と思考力・表現力・判断力の育成を図るために、交流活動をキーワードとして研究を進めることとした。平成20年6月の研究大会において提案した異学年合同の発展的教科学習「シャトル学習」の実践から、学習への意欲の向上や見方・考え方の広がりや深まりが見られたことも交流活動に着目した理由の一つとなった。言うまでもなく、学校教育においてはすべての教育活動は学級、学年、学校全体という集団で行われる。これらの中で、生徒は他の生徒との交流を通して相互に影響し合い、予想以上の成長を遂げたりする。学校という集団の中で学ぶことの意義は異なる価値観をもつ生徒同士の交流にある。もちろんここで言う交流とは単に情報を伝え合うことのみを指すのではなく、よりよい答えや解決策を目指して意見を闘わせたり、時には歩み寄ったりすることも含んでいる。そこで生徒はものの見方や考え方を広げ、価値観の多様性に気づき、その違いを認め合おうとしたりするのである。これらは知識・技能はもとより生活経験も少ない中学生の時期において、欠かせない学習である。この時期の生徒は言うなれば研磨される前の原石であるとすれば、その原石は多くの研磨剤によって磨かれることではじめて輝く宝石となる。そこで原石を磨き上げる研磨剤として、意欲的に取り組むことのできる学習材の工夫、単元構築の工夫、学びの意味化等これまでの研究で積み重ねてきた内容に加え、周囲の生徒をお互いに磨き上げる重要な存在として位置づけたい。そのためには、原石を磨き上げる場としての集団とはどのようなものであるべきか、さらにそのような集団を育成するにはどのような手立てをどのような場面で行っていく必要があるか等について、具体的実践を通して明らかにしようと本研究テーマを設定した。

また、研究の全体デザインとして、各教科学習においては学級という同一学齢の集団の中での交流活動、シャトル学習、総合的な学習の時間、特別活動等においては異学年合同の場における交流活動を位置づけ、様々な交流活動により、学ぶことへの意欲化とともに社会性の育成も図ることができると考えている。



2 主体的に学び続ける集団とは

(1) 「主体的に」

ここでいう「主体的」とは文字通り、活動や思考を行う際に他のものによって導かれるのではなく、自己の立場において行動や思考を行うことを指す。つまり、学習活動のみならず、学校生活全体において、常に自分はどうか、どう判断するか等をまず第一に考えることができることと捉えている。ただし、自己の考えのみに固執し、他を受け入れないということではなく、他と交流する前に、常に自己の立場を明確にしておくことが基盤であるということである。

その前提の上に立ち、自らの学びをより深化・拡充するために進んで他に意見や情報を求めようとする態度を指して、「主体的」と考える。

(2) 「学び続ける」

「学び続ける」とは文字通り、学習活動において自ら進んで学習に取り組むことを指している。ただし、これは教科の学習という場面での活動を基盤としながらも、その他の教育活動、生活全般へと徐々にその視野を広げることを念頭に置いている。このことは、これまでの本校研究において、「生涯学習の力」として強調されてきたところである。

新しい内容、出来事に遭遇した際に、そこに問題を発見し、その解決のための道筋を考え、実践し、その結果から再度出発する。一般にマネジメント分野で言われるPDC Aサイクル(plan-do-check-action)を学習においても自ら継続して行うことができる、その状態を「学び続ける」と考えたい。

(3) 「集団」

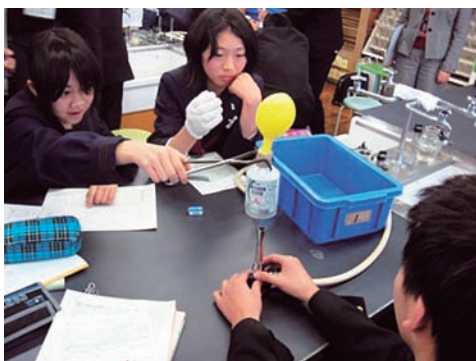
「集団」とは規則的、持続的な相互関係をもつ個体の集合、団体である。ここでいう集団とは単に何の目的も意図もなく寄せ集められた人間の集合を指すのではない。持続的な相互関係をもち、互いに影響を与え合う場として集団をとらえたい。特に学校教育においては、学級を中心的な単位として授業をはじめとするさまざまな教育活動が展開されている。学級、さらにその中のグループなどの集団はそれを構成する個を磨き合う場としての意味をもつ。

さらにこの「集団」はその教育活動の内容によって構成員が変化する。通常の教科学習においては、グループの構成員の変化、総合的な学習の時間、異学年合同のシャトル学習、学校行事などの特別活動においては、それぞれ異なった集団が形成される。いずれの集団においても、そこに属する個が、同じくそこに属する別の個と交流することを通して、自己を磨きあげることのできる土壌をもつ場として集団を考える。

(4) 「主体的に学び続ける集団」

今回の研究で目指す「主体的に学び続ける集団」とは、そこに属する一人一人が、互いに作用し合って学習内容をより深めたり、広げたりすることを実現できる集団であると考え。つまり、構成員である個人の主体的な学習をさらに促進するものでなければならない。その集団は常によりよい学習や活動を志向するものである。そういった集団であるならば、そこに新たな個が入ったとき、集団の作用によって、その個を磨き、高めることが可能となる。また、その過程において新たに入った個も、次には他を磨くことのできる主体性をもつ個となっていくと考える。

学習やさまざまな活動において、直面する課題についての問題を発見し、その問題を解決するよりよい方法を模索する。そしてその方法を実践し、結果を考察し、新たな課題の発見へとつなげていく。そういった方向性をもつ集団を目指したい。



【協力して実験をする様子】



【話し合った結果を実技で表現している様子】

3 「主体的に学び続ける集団」を育成するための方法

(1) 集団の意義と実現方法の共通理解（教師、生徒）を図る

生徒自身に集団での学び、交流活動を求める際に必要となるのは、その意義を理解させることである。これは意義を説明すればよいというものではない。きちんと意義を説いた上で、実践を重ねていくことが必要である。そのためには生徒と教師がともに目指す集団の姿やその基盤となる事柄を理解しておく必要がある。

目指す集団とは

「ともに学び、高め合う存在として、自他を尊重する集団」

その基盤として

「集団での学びを通して、一人一人の個性の伸張が図れること」この点を共通理解し、共通実践を行っていくことではじめて主体的に学び続ける集団が実現できると考える。「主体的に学び続ける集団」の全体像をもとに、各教科においては、教科の目標等に照らして、どのような生徒を目指すのかを具体的に描き、そのためにはどのような学習をしかけ、どんな課題を与えるか等について、まず考えなければならない。

(2) 研究的実践の重視

本校研究は、実践研究でなければならない。研究大会はその実践研究の成果を発表する場である。今からやろうとすることを見せるのではなく、実践を積み上げてきた成果を見せる場としたいと考えている。そのためには多くの実践から学び、反省し、よりその内容を磨き上げていかななくてはならない。教育実践者としての研究へのスタンスは常に帰納的であるべきだと考える。

実践的研究から見えた成果や課題から理論は導き出される。ただし、帰納的な研究から普遍的な原理・原則を導き出すには、数多くの実践事例が必要である。この点において今後は視点や方法を明確にして、共通の視点と方法のもと、各教科授業の実践に取り組んでいく必要がある。

(3) 具体的共通実践

① 共通理解

- ・「聴く」ことの重要性、意味を常に説く（互いを同じ学習者として認める）
- ・教科学習において、全員が発言する（声を出す）場面を必ず作る
- ・交流の場面設定におけるねらいを明確にして実践する（教科レベル、領域（分野）レベル、単元レベル、授業レベル）

② 方法

- ・交流のグループは原則としてペア（2人）とグループ（4人又は6人）とする
- ※ 交流活動における生徒のスキルの習熟には同一実践が重要である
- ・交流活動の場面、ねらいに合わせた原則を定め、どの教科でもその原則にのっとって実践する

4 21年度の実践へ向けて

平成20年度の研究大会を終えて、後期より新たな研究をスタートさせたばかりである。新しい学習指導要領の移行期間ともなる21年度は、これまでの本校研究の成果を生かしながら、今求められる教育とは何か、それを具体化する授業とはどうあるべきかについて、「交流活動」をキーワードとして、実践を積み重ねていきたい。その中で、「つなげる」「広げる」「深める」交流活動のあり方を明らかにしていきたい。



【結果の考察における交流活動（理科）】



【内容を説明する交流活動（社会科）】



【異なる考えを知る交流活動（数学科）】

《国語科》

言語認識を深め、言語感覚を磨き続ける生徒の育成 — 学習集団の計画的スキルアップによる交流活動の深化 —



小林 理昭



佐藤 浩二

「主体的に学び続ける集団」を次のようにイメージする。

ある課題について全員が考えている。そして、全員が自分自身の意見を持っている。機が熟すると、意見交流が始まる。その過程で、自他の意見の相違点や共通点が明らかになっていく。学習集団は各個の多様なものの見方や考え方を統合し、最終的には個人では到達できないレベルの、より深い理解や解釈に至る。

その結果、集団を構成する個々の生徒が、満足感や成就感を持ち、次の課題解決への意欲が向上する。

このような学習集団を育成することは、一朝一夕にはできない。集団全体のスキルアップを継続的、計画的に行う必要がある。現段階では以下のように考えている。

まず第一に、自立した個を育成する必要がある。自分の意見を持たない、あなた任せの個がいくら集まっても実のある交流にはならない。題材の本質を突いた論点を見つけ出す能力、根拠となる表現をテキストから見つけ出す能力、文章にまとめる能力等が必要となる。

次に、「発言する」能力を向上させる必要がある。自分の考えを的確に相手に伝えられなければ、交流は成立しない。「事実の論述」から始め、徐々にレベルを上げ、最終的には「解釈の論述」ができるようにする。

上記の内容を、学年ごとに目標点を設けて継続的に指導し、成果を検証していくことを計画している。



【自由に意見交換する生徒の様子】

《社会科》

市民的資質を育成する社会科学習のあり方 — 確かな社会認識の育成につながる交流活動を通して —



北岡 隆



笹本 隆志

これからの未来を担っていく生徒にとって社会科の学習内容が本当に意味あるものとなるためには、確かな事実認識をもとにして、その共通性や特殊性に着目しながら、社会的事象のもつ意味や本質を理解することが必要である。その上で、自分なりの価値判断や意志決定をしたり、未来予測をしたりすること、そしてそれを周囲に対して表現し、その考えを交流させていくことが市民的資質の基礎となると考える。

「市民的資質」のとらえ

地球社会の成員として、社会事象を事実に基づき多面的・多角的に考察し、より確かな社会認識のもと、自ら積極的に持続可能な社会の実現に関わっていこうとする態度

学習経験や生活経験のまだ少ない生徒にとって、周囲に存在する見方や考え方の異なる学習者との交流は新たな視点や考え方に気づかされたり、あるいは自分の考え方の補強をしたりする上で、貴重な学習材となる。また、交流活動はこれからの地球社会を市民として生き抜いていく生徒にとって何よりも重要な表現する力や社会性の育成においても重要な意味をもつものである。さらに、ともに考えることは、認識を深めたり、広げたりするのみならず、社会科の楽しさやおもしろさを実感させることにもつながると考えている。

《20年度後期の実践》

○ 1年地理的分野 「水から考える滋賀県」

「滋賀県」を取り上げ、環境という視点から、近畿地方全体のこれからの「持続可能な社会」というキーワードをもとに考えていく学習を展開した。

○ 3年公民的分野 「国民生活と福祉」

生徒が実感しにくい経済について、モデル化した金融ゲームを通して、生徒自身が気づいた点を交流させ、認識を深める学習を展開した。



【社会認識を深める交流活動の様子】

《数学科》

数学のよさや楽しさを実感させる数学教育のあり方

－ 説明し伝え合う交流活動を通して －



木谷 直充



半山 章人

全体の研究主題、主体的に学び続ける集団を育成するためには、数学のよさや楽しさを実感させることが大切である。そのために交流活動をどのようにすべきかについて、研究を進めていく。

「数学のよさ」については、新指導要領の目標に新しく加わった言葉であり、以前の指導要領の目標の「数学的な見方や考え方のよさ」に代わる言葉である。教科調査官の永田潤一郎氏は、次のように記述している。

「数学的な見方や考え方のよさを知り」を「数学のよさを実感し」と改め、「数学」の意味する内容を広くとらえ、数量や図形などに関する基礎的な概念や原理・法則、数学的な表現や処理の仕方、数学的な見方や考え方はもちろん、先人の努力によって生み出された成果とともにそれを生み出した先人の動機や着想、それを可能にした方法、数学が生活に役立つことや数学と科学技術との関係などに関わる知識も含めるものとして、これに対応することにしたのである。【「新しい中学校学習指導要領が目指す数学教育」日数学会誌第90巻第5号17p】

「数学のよさ」はこれまでの「数学的な見方や考え方のよさ」を広げたものであり、生徒に実感させることで、数学の必要性や意味を理解させることができると考える。「楽しさ」については、2つのことを考えている。1つは、「内容が理解できる」ということである。授業がわからなければ、楽しいはずはない。授業がわかることが必要不可欠である。2つめは「数学をすること自体が楽しい」ということである。何らかの意味があつて数学をするのではなく、数学そのものを目的としているということである。

「数学のよさ」や「楽しさ」を実感させることで、主体的に学び続ける集団が育成できると考える。



【4人班で交流活動をしている様子】

《理科》

身近な自然事象に関心を持ち、科学的に思考できる生徒の育成

－ 交流活動の工夫によって、考察する力を高め合う理科学習 －



長谷川 忍



若林 教裕

平成20年3月に新学習指導要領が告示され、理科の新しい方向性が示された。今回の改訂では、科学的な探究能力育成のための系統性が考慮され、小学校から培っている問題解決能力をさらに伸ばし、観察、実験の結果を分析して解釈することにより、規則性を発見したり課題を解決したりする方法を身につけさせ、科学的な思考力を育成することに重点が置かれている。

最近の生徒は理科の学習に対する意欲は高いが、大切だという意識は低く、「実験は好きだけど考察は嫌い」「考察の仕方が面倒でわからない」と捉えている。生徒の考察を見ると、結果が考察になっていたり、教科書に記述している内容や他の生徒の考察を写していたりするものが多い。また、考察の中に自分の考えが含まれていなかったり、結果から導いた根拠でなかったりするものも多い。

そこで理科では、考察場面に必ず交流活動を位置づけ、考察する力を高めようと考えた。交流活動の手だての1つとして、「交流シート」を利用した。これは、問題解決の過程において自己の新たな気づきや印象に残ったことを付箋に記入させ、記録を残していくものである。「交流シート」に班員の予想や考察を書いた付箋を貼らせることによって、1枚のシートに学習履歴が残っていくので、後に変容を一目で確認することができる。生徒は、この交流活動で自分の考えを仲間に伝え（つなげる）、自分と違う考えに出会い（ひろげる）、仲間とじっくり話し合い（深める）、認め合うことを経験する。交流活動を位置づけることによって、考察の苦手意識を減らしたり、成就感を与えたりすることで、実験後の考察の大切さが実感できる。科学的に思考できる生徒を育成するために、考察する力を高め合う交流活動の工夫に焦点を当てて、新しいカリキュラムの編成や教材の開発を行っていくことが大切であると考えている。



【ボーリング試料を観察する様子】

《音楽科》

豊かな感性を育てる音楽科学習のあり方

ー ともに学び響き合う交流活動を通して ー



可児 智恵子

音楽科教育の目標とは、生徒が、音や音楽が醸し出す雰囲気や美しさなどを感性を働かせて感じ取り、思いや意図をもち表現したり聴いたりすることで、人間的な成長を促し豊かな情操を養うことにある。また、音楽を表現する楽しさや喜びを味わうことで、生涯にわたって音楽に親しみ、自己の生活や社会に生かしたり、豊かにしたりする態度を育成していくことが求められている。しかし、生徒が自らの感性を働かせて感受し表現していくことや、それによって生み出された音楽の美しさを仲間と共感し、深く味わっていく機会は少なく、生活を豊かにするものとしても十分にとらえられていない現状がある。

そこで、本研究では交流活動を通して、仲間とともに音楽の美しさを感じ、表現を工夫させていくことで、豊かな感性を育てていきたいと考える。音楽科の授業では、交流活動は欠かすことのできないものとしてこれまでも取り組んできたが、さらにそのねらいや目的、交流の場面や方法について見直し、音楽だけではなく仲間とも響き合える関係を築かせたい。また、ペアでの活動、パート別などグループでの活動、全体での活動といった様々な場面において、仲間とともに取り組む共通の音楽体験を積み重ね、豊かな感性を育てることにつなげていきたいと考える。さらに、日本の音楽や地域の民謡等の学習も充実させ、自分の生まれ育った故郷のよさを音楽からとらえさせたい。これらの活動が、生涯音楽を愛好する心情や自国の音楽文化を尊重する心の基盤となり、自己の生活や社会に生かすことにも役立つと考える。



【ペアで水道管尺八に取り組む様子】

《美術科》

創造活動の喜びを味わう美術の学習

ー 自他のよさを認め合う交流活動を通して ー



竹村 亜貴

創造活動の喜びは、生徒一人一人が楽しく主体的、個性的に自己を発揮したときに味わうことができる。表現活動では、自分の考えを基に、自分の表現方法で作品にできたときに実感することができる。また、鑑賞活動では、自分の見方や感じ方に基づいて創造力を働かせてみることで作品に対する見方が深まり、自分にとってのよさを見つけたときに味わうことができると考える。そのための手段として、次のような交流活動を取り入れて授業を行っている。

- ・ 他の見方や考えを知り、自分の考えを整理したり、新たな発見をしたりすることができる交流活動
- ・ 他の表現方法を知り、自分なりの表現方法を探したり見つけたりすることができる交流活動

右の写真は、墨と水と筆やスポンジなど様々な道具を使って、身近なものを描く授業の様子である。対象の何をどのように表現したか他に説明する。それによって、他の工夫点を見つけたり、自分の表現のよさを認められたりする。それを次の制作へ生かす。このような段階を経て、墨の濃淡や、かすれ、筆の勢いなどによって、対象の立体感や色彩や質感を表すことができることを発見していった。しかし、グループでの活動が、単なる作品の見せ合いだけにとどまる場合もあった。今後は、次のような点に取り組んでいきたい。

- ・ 自分の表現を見直したり、さらに追究したくなるような交流活動の在り方を探る。
- ・ 作品を見て、それまで気づかなかったことに気づくことができるような交流活動の在り方を探る。
- ・ 毎時間の授業で、継続でき、効果的な交流活動の在り方を探る。



【自分の表現を他に紹介する様子】

《保健体育科》

生徒が動く・伸びる・輝く保健体育学習

－ 運動のイメージを広げる交流活動を目指して －



長尾 健司



千木良 佳亜

保健体育科における今回の学習指導要領の改訂で、体育分野における学習内容は、「体力」「技能」「知識」に区分され、習得すべき基礎的・基本的な学習対象となった。また、6・3・3制に縛られず、小学校から高等学校までの12年間を見通して、卒業後も少なくとも1つの運動が継続できるように発達段階を踏まえ、指導内容のまとまりを、4・4・4の区切りによって配列するという、これまで試みられなかった画期的な考え方が示された。

本年度の研究発表では、上級学年とのシャトル学習により、学習効果をより深めながら、通常の授業との関連を図ったカリキュラムを構築し、「学びの意味化」を図ってきた。また、通常の授業の中では、チームゲームを中心としたさまざまな交流を通して、生徒が主体的に動き、技能を伸ばし、笑顔の輝く保健体育学習を目指し、実践を行っている。授業の中では、ペアを中心とした交流活動で個人の技能向上を図るのはもちろんのこと、チーム内での交流やチーム同士の交流によって、戦術の知識を広げることを中心のねらいにおいて授業を行った。本年度は、フラッグフットボールとフットサルを題材として取り扱ったが、その交流活動によって得られた「ボールを持たない動き（off the ball movement）」は、他の侵入系の球技に関連性が深く、動き方の転移によって、種目を越え、新しい発想が生まれていくことを期待している。

来年度からは、新学習指導要領を踏まえ、年間を通して1、2年生合同によるカリキュラムの構築を考えている。異学年を中心とした交流の研究を進めるとともに、交流活動における効果的な話し合いの仕方や、相互評価の視点についても、実践を重ねていきたい。



【チームで作戦を考える様子】

《技術・家庭科》

よりよい生活をめざし主体的に学ぶ生徒を育てる技術・家庭科教育

－ 実践的な態度を育てるための交流活動とその支援のあり方 －



近藤 てるみ



氏家 徹也

技術・家庭科では、よりよい生活をめざす生徒を育成するための継続研究を行っている。生徒がよりよい生活を求めるためには、自らがそれを常に意識し、進んで言動をとろうとする態度が大切であると考え、問題解決的な学習を意図的に組み込んでいる。問題解決的な学習を効果的に行うためには、カリキュラム内での配置はもちろんであるが、本時の学習指導を充実させるために、どのような情報やモノの交流が行われるかを焦点化し授業実践を行っている。ここでいう交流活動とは、生徒が習得したいことに対し、どうすればその目標を達成できるのかを考えて、必要な資料を探してきたり、実習や観察を行ったり、製作したり、人にきいたり、友だちどうしで話し合ったりする活動すべてであると考えている。

本年度の実践において、技術分野では、情報通信ネットワークを利用する際の不易と流行の面を扱い、個人が直面している問題を社会問題の一部とし、その解決を求めるための方法をグループで考えさせた。家庭分野では、調理実習したことを他の調理にも応用できる力をつけたいと考え、家庭で収集させた情報をグループで紹介した後学級で共有させ、再びグループに返し実習させるようにした。今後も、目標達成のために下の視点について交流活動を進めていきたいと考えている。



【話し合ったテーマを発表している様子】



【家で聞いてきたことを紹介している様子】

- 問題解決的な学習のどの場面で交流活動を行えばよいのか。
- 基本的な交流のさせ方、手法はどのようなものがあるか。
- 学習内容により、どのような学習形態が最も効果的か。

《外国語科》

バランスのよい4技能習得を目指した英語学習のあり方

－ 支え分かち合う交流学習を通して －



小川 正晃 西村小夜子 北内 得子

外国語科が今回の研究で一番のテーマにするものが英語学習における「支え分かち合う力」である。この「力」を外国語科独自で定義づけ、それを如何にして英語学習に生かすことができるのか、Teaching Skill 向上を目指す視点で考えていきたい。

そこで「支え分かち合う力」を『友との交流』と『自己の交流』の2つに大別する。

○『友との交流』

この「力」は「友だちと教え合い、分かち合い、そして高め合う力」と捉えることができる。

「つなげる・広げる・深める交流活動」という全体研究の視点を教科に置き換えれば、この『友との交流』になると考えた。

○『自己の交流』

この「力」は「自分の中で、学んだ知識を結びつけられる力」と捉えることができる。今まで獲得してきた知識を上手く結びつけ、今までの学びをさらに深めたり、また、その深い理解から新しい発想を生み出したりする力と考えることができる。この力を引き出すためには、教師からの意図的発問や効果的な題材選びが求められる。

「友との支え分かち合う力」を授業の中で効果的に用い、そして生かすことによって、「自己の支え分かち合う力」の向上に繋がると考える。また、Teaching Skill 向上のための新たな手法の提案が、全体の研究主題である「主体的に学び続ける集団の育成」に外国語科として大きくアプローチできると信じている。



【4人班での交流学習の様子】

《学校保健》

生涯にわたる健康で健全なライフスタイルの確立をめざして

－ セルフエスティームの高まりを目指した思春期における性指導と相談活動のあり方 －



高岡 加苗

近年、社会環境やライフスタイルの変化に伴い、生徒を取り巻く健康課題も大きく変化してきている。学校で行う健康教育はますます重要になり、その充実が求められている。昨年の学習指導要領改訂の中では、引き続き「生きる力」の育成とともに、「豊かな心や健やかな体を育成」することが基本的な考え方として提示されている。豊かな心や健やかな体を育成する上で、生徒一人ひとりの自尊感情（セルフエスティーム）がキーワードになると考える。セルフエスティームの高まりを目指した健康教育に取り組むことで、「生きる力」すなわち、「生涯にわたる健康で健全なライフスタイルの確立」を促し、それを実践し続けることのできる生徒になってほしいと願っている。

そこで、集団への働きかけとして「性の指導」を、個別の働きかけとして保健室における「相談活動」の充実を図っている。「性の指導」に関しては、生徒の発達段階やニーズに即した内容であること、保護者や教員の願いや意識も大切であると考え、3者の意識調査を実施し、本校の実態や課題を明らかにしていった。その結果に基づき、学年により学年一斉指導や男女別指導というように指導形態も弾力的にしながら、指導を進めている。自他の生命尊重や疾病回避の行動選択ができるなど、「生き方の指導」につながる「性指導」でありたいと考えている。また、保健室における「相談活動」としては、頻回来室者を中心に事前にとった自尊感情尺度を参考にしながら、個別の支援にあたっている。効果的な校内連携を図るためにも、相談活動の記録の工夫や活用の方法について検討している。

このように集団と個別の支援を組み合わせながら、生徒の健康課題に寄り添い、養護教諭としての専門性を生かせるような支援の在り方について研究を進めている。



【学年合同で性感染症予防について学ぶ様子】

1・2年生シャトル学習（小学生来校）

附属坂出小学校の6年生を対象に、小学生数名ずつが本校1・2年生の授業に参加する形で行った。小学生とともに学習することで、中学生の学習意欲がどのように変容するかを見取ろうとしたものである。

事前に本校教員が小学校に出向き、中学校での生活や学習についてガイダンスを行った。その後、教科の希望調査を行い、それに基づいて小学生を振り分けた。各教科とも当該学年の普通授業として行うが、特に小学生との交流がある活動を取り入れるよう配慮した。

実際の授業では、学習過程に交流活動を取り入れることで、初めは緊張気味であった小学生もすぐにうち解け、和やかな雰囲気の中、授業が行われた。短時間ではあったが、小学生に分かりやすく伝えようと、いつも以上に基礎・基本を丁寧に振り返る姿が見られた。また、いいところを見せようと、気を引き締めて授業に臨んだり、間違えないように集中して問題を解いたりするなど、学習面・態度面での効果も感じることができた。1、2年前の自分の姿と重ね合わせ、現在の自分自身の成長に気づき、自信を得たり深めたりできた生徒がいたことも、小学生と授業を行った効果の一つといえるだろう。

また、小学生に対するアンケートでは、「中学校に進学する不安が減少した」と答えた者の割合が9割を超えた。シャトル学習は中1ギャップ解消のためにも成果があると考えられる。

開設した教科と授業内容

年	教科	授 業 内 容
中1	数学	切断するとどんな形になるだろう
	理科	白い粉を区別するには
	英語	英語をどれだけ聞き取れるかな？
	技術	コースターを作ろう
	家庭	衣類の表示を調べよう
中2	国語	古文の音読と百人一首を楽しもう
	社会	第一次大戦後の日本
	音楽	合唱・合奏「翼をください」他
	美術	イメージを形にしよう
	保体	体づくり運動～リズム縄跳びに挑戦～



【美術での共同作業している様子】

3年生シャトル学習（高校訪問）

近隣の普通科高等学校（香川県立坂出高等学校、香川県立丸亀高等学校）に本校3年生の訪問と授業参加を依頼した。2日間の日程で行った。1日目には本校3年生（120名）を60人ずつの2つのグループに分け、それぞれ2つの高等学校に別れて参加した。2日目にはそれぞれのグループが交代してもう一方の学校に参加することで両方の高校を体験できるようにした。それぞれの高校で1単位時間の授業を選択し、高等学校の生徒とともに学習した。なお、坂出高等学校は50分授業の16コース設定で、丸亀高等学校は65分授業で30コース設定であった。事前に高校教員を招聘し、授業内容や高校の授業にあたっての心構えについて説明を依頼した。これによって生徒は事前に授業の内容をよく理解することができ、予習等の準備をしていくこともできるようになった。



【音の周波数について学習している様子】

【生徒の感想】

- 授業が始まったとき、「ビット」や「バイト」など、今まで聞いたことのない言葉がいきなり出てきて、授業についていけるかどうか不安になりました。だけど、授業が進んでいくにつれて、不安よりも授業が楽しいという思いのほうが強くなりました。中学校で学習する内容よりもより発展した難しい内容だったけれど先生が説明してくださったことが理解できたときは、充実感がありました。【 情 報 】
- 私は、マンドリンという楽器を、今回の授業ではじめて見て、演奏しました。今まで、三味線を少しだけ演奏したことはあるものの、四本の弦の楽器を演奏したのは初めてでした。そんな「初めて」がたくさんの中、高校生と一緒に合奏するという事は難しかったけれど、すごくおもしろかったです。受験を控えている今、高校訪問はいい刺激になり、受験勉強の励みにもなりました。【 音 楽 】

3年生シャトル授業（大学出前授業）

シャトル学習の一環として、大学の専門的で高度な内容の学習をすることで、中学校での学習の大切さを実感させる。また、大学の先生を招き、専門的な内容の授業を行ってもらうことにより、中学本来の学習内容を深化・拡充させるとともに、学習意欲を高めることや自己の進路に生かすこともねらいとしている。



【「六法」を読む様子】

香川大学の先生を招き、1単位時間の授業を行っていただく。可能な限り、学部各分野の基礎・基本の内容を中学生にも分かるように教授していただくとともに、活動を伴う授業の展開を依頼した。事前に大学の意義や学部の内容及び開設の講座内容等についてガイダンスを行い、生徒の希望する内容に分かれて受講した。

学部	指導者	内 容
教育学部	加野 芳正	未来に向かって、私たちの仕事と家庭を考える
医学部	中村 丈洋	頭のこわい病気 脳梗塞の話
経済学部	丹羽 佑一	日本史と坂出史
工学部	長谷川修一	学校で地震にあったらどうする？
農学部	川浪 康広	分子模型で体験する科学の考え方
法学部	辻上 佳輝	「六法」を手にとってみよう 読んでみよう

【生徒の感想】

○ 原子模型を使うことで水がろ紙を通過する様子など、分かりやすかったです。また、水素と酸素を反応させて動力を取り出す燃料電池をホンダが実用化しているそうです。これはインフラが整っていないので実用化は難しいだろうけど、地球温暖化を進める物質を出さない素晴らしい技術なので、もったいないと感じました。

【分子模型で体験する科学の考え方】

○ 法律と聞くと難しいことばかりで、私たちの生活には関係のないものだと思っていましたが、民法は世の中で最低限守らなければならないことで、私たちの生活を束縛することではなく、逆に自由に生活できるためにあるのだと知りました。法律を学ぶことで問題が起こった時に、どのようになるかという道筋が分かるので便利だと感じました。

【「六法」を手にとってみよう 読んでみよう】

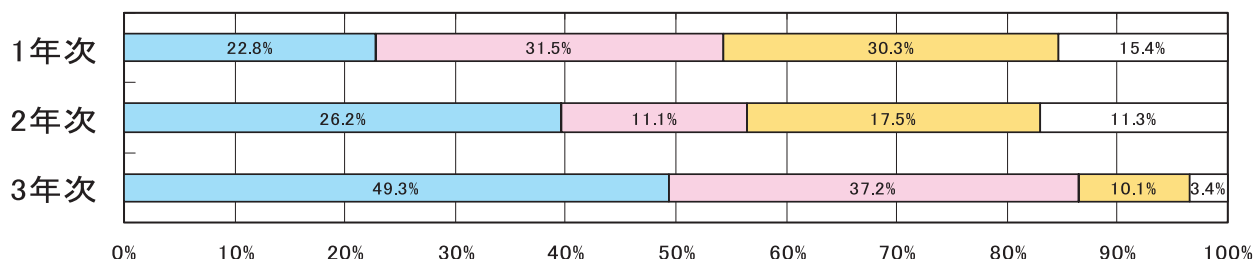
シャトル学習に関するアンケート結果

1～3年次のシャトル学習の前後で、生徒たちにどのような意識の変容があるかを把握するために全生徒を対象に調査を実施した。

交流面について

☐ はい
 ☐ どちらかというところである
 ☐ どちらかというところでない
 ☐ いいえ

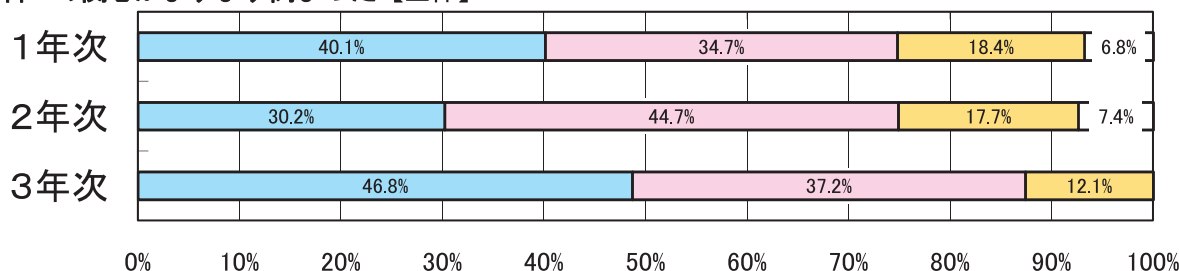
異なる学年の生徒と積極的に意見交換ができた【全体】



積極的に意見交換ができた生徒は年を重ねるごとに増加している。特に3年次は「はい」と答えた生徒が50%近くにまで達し、事前事後の増加率も35%と全項目の中で最も高かった。学年ごとに調べると、1、2年生が30%、3年生は40%とどの学年も大きく向上している。各教科の見取りからも時間を重ねるにつれ、異学年での意見交換が盛んに行われるようになった。中でも3年生はグループの中心になって話し合いや作業をリードしていく立場であったため、自分の考えを盛んに述べたり、下級生の意見を聞いてまとめたりする場が多かったことが大きな向上につながったと考えられる。3年生は下級生に教えることで、下級生は3年生に教えられることで互いの視野が広がり、学びも深まったと考えられる。

意欲面について

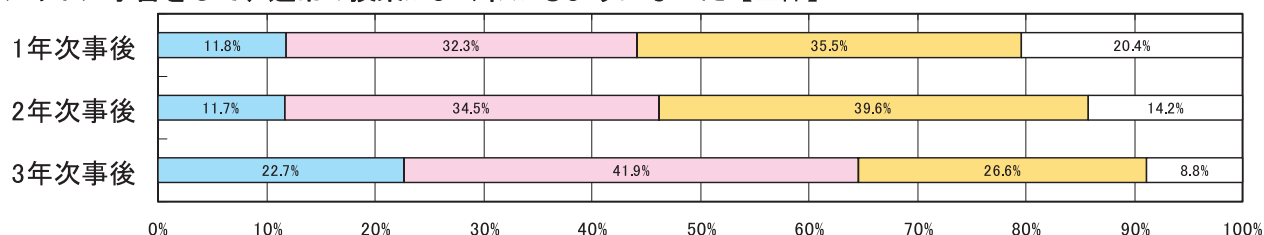
その教科への関心がますます高まった【全体】



結果より、毎年シャトル学習に関心をもって楽しく取り組めた生徒が70%以上もいることがわかる。特に3年次が高く、全学年を通して90%近くにもなった。学年ごとに事前事後の変容を分析すると、関心においては3年生が10%に対して、1、2年生は30%増加していた。上級生の発言内容や学ぶ姿勢から下級生のほうが大きく刺激を受けたと考えられる。

効果について

シャトル学習をして、通常の授業がよくわかるようになった【全体】



シャトル学習をして、通常の授業がよくわかるようになった生徒は毎年全体的に多くなっている。3年次は特に高く、学年ごとに調べると、3年生が55%、1、2年生が70%と下級生の方が高かった。

あとがき



副校長 環 修

本年度は、文部科学省からの研究開発指定「異学年合同の発展的な学習（シャトル学習）」の最終年度として、昨年6月に研究発表会を行い、本年3月にシャトル学習の成果をまとめた「学びの拡充をめざす異学年合同学習」を黎明書房から出版いたしました。このシャトル学習では、3学年で合同の異学年集団を編成し、教科の発展的な内容の学習に取り組んできました。低学年の者は、上学年の者の考え方や発表の仕方に刺激を受け、上学年の者は、低学年の者を教えることで、学習内容をより確かなものにすると同時に、上級生としての自覚も芽生えてきました。

また、6月の研究大会以後は、新学習指導要領の趣旨に基づいた教科指導を中心に、「交流活動」をキーワードとして新たな研究に取り組んでいます。同学年学級での交流、異学年での交流とその範囲を広げ、より豊かな学びへと深めていこうと考えています。まだまだ、試行錯誤をしながらの研究実践ですが、今後とも、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

編集委員

北岡 隆 氏 家 徹 也
小林 理 昭 半 山 章 人
若林 教 裕 竹 村 亜 貴

平成21年3月3日

編集 香川大学教育学部附属坂出中学校
〒762-0037 坂出市青葉町1番7号
TEL/0877-46-2695 FAX/0877-46-4428
E-mail sakachu@ed.kagawa-u.ac.jp